

特別助成 東日本大震災の被災者を元気づける事業

「椿の学びづくり推進協議会」事業

気仙沼の防潮林再生に向けて 多世代ボランティアが地元住民と協働する地域間交流活動

東日本大震災で津波被害を受けた宮城県気仙沼市前浜地区の植林活動「前浜椿の森プロジェクト」では、学生ボランティアと新宿区戸山団地のシニアが地元住民と協力して活動している。育苗・植樹を通じた現地との多世代の地域間交流はコミュニティの活性化につながるとともに、防災について多角的に考える学びの場にもなっている。



大学生が地元住民と協働で苗木を育成し、植樹を行っている

新宿区内の大学生と地域のシニアが協働して被災地へ提供する苗木を育成

津波で多くの森林を失った気仙沼市では、地域の植生を生かした防潮林の再生が、市の復興計画のひとつに組み込まれている。同市本吉町前浜地区では昔から親しまれてきた椿を中心に植林する「前浜椿の森プロジェクト」が動き始めており、2012年より早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が支援活動を行ってきた。さらに、より広いネットワークで活動を展開するため、新たな活動拠点として「椿の学びづくり推進協議会」が設立された。

「前浜地区は流失したコミュニティセンターを住民主導でいち早く再建するなど、住民活動が盛んな地域。住民同士のつながりが強い一方で、外部から人材を受け入れる土壌もあるこの地域で、防災面だけでなく、環境や地域コミュニティ再生においても復興モデルとなるように、息の

長い取り組みをしていきたい」と、協議会を運営する白鳥円啓さん(一般社団法人環境復興機構代表)、廣重剛史さん(目白大学講師、WAVOCコーディネーター)は目的について話す。

活動の柱となるのは、育苗・植樹・交流イベント開催の3つ。早稲田大学や目白大学を中心とする学生が現地で種子を採取し、同じ新宿区の戸山シニア活動館の利用者とともに苗木を育て、地元の住民と協働で植栽地の造成から植樹までの作業を行っている。昨年は1600本の苗木を前浜に搬出した。こうした活動は、学生が種子の採取や地域学習のために定期的に現地に赴くことで地域間交流の活性化につながり、一方、戸山地区のシニアが被災地復興の一端を担うことでやりがいを感じ、また学生にとっても高齢者との交流は身近に高齢化の課題に向き合う機会になっている。

植樹祭と学び合いのイベントを通して世代間・地域間交流を活性化

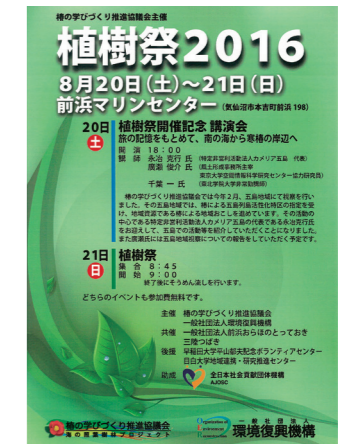
植樹は2014年より始められ、年に一度の植樹祭は一大イベントに位置づけられている。今年度は昨年8月21日に開催された。これに先立ち、20日には前夜祭として前浜マリセンターにおいて、五島列島で特産の椿を活用した地域振興を推進するNPO法人の代表や、環境デザイナーの廣瀬俊介氏を招いて記念講演会が開かれた。植樹祭当日は高校生や大学生、戸山シニア活動館の人たちをはじめ、各種団体の関係者や研究者の参加もあり、地元住民を含め総勢約110名で東京で育てた苗木を植樹し、その後は音楽イベントや懇親会などで盛り上がった。「前年の参加者は50名ほどでしたが、今年度は多様な世代、多様な属性を持った人たちがたくさん参加してくれた、活

動の広がりを感じる植樹祭になりました」と、廣重・白鳥両氏は振り返る。

また植樹祭のほかにも、前浜地区と戸山地区を中心に年間を通じて様々なイベントを開催している。三陸の自然や歴史を現地で学ぶフィールドワークや体験学習、環境、土木、医学など各分野から防災について考える学習会やシンポジウムを開くなど、「学び合い」を通して地域間、世代間の交流を図っているのがこの活動の特徴でもある。「防災には、命を守る、生活を守る、自然を守るなど、様々な観点がありますから、それぞれの知識を得ながら、包括的な防災への視点を地域の方々と一緒に養っていかたいと思っています」と両氏。椿の森づくりを通して、「教育・環境・福祉・防災の一体的取り組み」を進めている。



植樹は学生と高齢者、地域住民同士の交流の機会となっている



「植樹祭2016」のチラシ

助成団体: 一般社団法人 環境復興機構

<http://env-reconst.org/>



復興支援活動への継続的なご支援を期待します

本来、復興とは元の形に戻すだけでなく、発展させてつくり上げていくものだと思います。そのためには、最低でもあと4~5年は支援が必要だと考えています。AJOSCには継続的な視点で今後も被災地支援に目を向けていただくと期待します。このたびは本当にありがとうございました。

一般社団法人 環境復興機構
代表理事 白鳥円啓さん